

「辺塞詩」研究序説

— 「辺塞詩」ジャンル意識の形成 —

呉 雨 清

Introduction to Research on Chinese Frontier Poetry:
Formulation of the Concept of the Frontier Poetry Genre

WU Yuqing

Abstract

The purpose of this paper is to understand the connotation of the term “frontier fortress” and the formation process of frontier poetry through the collation of war poetry since the pre-Qin period (prior to 221 BC) and literary criticism since the Northern and Southern Dynasties (420-589). The first part provides a brief collation and summary of relevant research in the academic community. The second part explores the geographical areas referred to by the term “border fortress” before the Tang Dynasty (618-907) through the collation of the term “border fortress” in pre-Tang historical books. The third part lists the war poems before the Northern and Southern Dynasties and clarifies the inherited relationship between the border poems and the war poems from the pre-Qin Dynasty to the Three Kingdoms (220-280) and the Jin Dynasties (266-420). The fourth part analyzes the content characteristic of poets’ analogous works in the Northern and Southern Dynasties and clarifies that poetry with the three themes of garrisoning on the border, military, and warfare became separate kinds of poetry. The fifth part concludes that the poetry category of “border poetry” had basically formed during the Tang and Song Dynasties (960-1279) through the analysis of the criteria for selecting poems in the *Souyu xiaoji* (搜玉小集 *Little Collection of Searching for Jade*) of the Tang Dynasty and the poems under the heading of “military” in the *Wenyuan yinghua* (文苑英華 *Finest Blossoms in the Garden of Literature*) of the Song Dynasty.

Keywords : 辺塞詩、従軍詩、南北朝

筆者は、中国南北朝期の、戦争に関連する詩歌の研究を進めている。これは、一般的に「辺塞詩」と呼ばれるが、実のところ「辺塞詩」の定義については、さまざまな論者がさまざまな説を提出していて、共通した認識がない。本稿は、この「辺塞詩」の定義を明確にするための第一段階である。

一

中国の大学の教科書としてよく用いられる、袁行霈 [主編]『中国文学史』¹⁾では、南北朝・宋の詩人、鮑照についての論述のなかに、「描寫邊塞戰爭，反映征夫戍卒的生活，是鮑照詩歌的一個重要內容（辺塞での戦争を描寫し、出征し國境警備にあたる兵士の生活が反映されているのが、鮑照の詩歌の重要な内容である。）」と述べる。すなわち、鮑照の詩は「辺塞」の地を描く詩として位置づけられている。同書²⁾ではさらに「高適、岑參和創造慷慨奇偉之美的詩人」の節で、「以邊塞為題材の詩歌，盛唐時蔚為壯觀（辺塞を題材とする詩歌で、盛唐期に盛んになった）」と述べているので、同書は「辺塞詩」とは「辺塞を題材とする詩歌」と見なしていることがわかる。

ただし、この言い方は、ただ字面をなぞっただけの解釈であり、きわめて雑駁である。「辺塞詩とは何か」——「辺塞詩」——の定義を考えるためには、以下の二つの視点が必要であると考える。

一、「辺塞詩」とは、いつ誕生し、どのように発展したのか。

二、戦争を描く詩歌をすべて「辺塞詩」と見なすことはない。例えば、汪守徳『中国戦争詩歌』（解放军出版社、2009年）という本がある。これは中国の歴代の戦争に関する詩歌を集めたものであるが、この書はこれらの詩歌「辺塞詩」とは呼んでいない。

では、戦争を描く詩歌のなかで、どの作品が「辺塞詩」であり、その作品「辺塞詩」とは見なされないのか、その境界線はどこにあるのか。

1924年、徐嘉瑞『中古文學概論』³⁾第五篇第二章「唐代文學の分類」では、「辺塞」を獨立させて一つの流派として並べ、現代の意味での「辺塞詩研究」を切り開いた。しかし、ここでは辺塞詩を作った詩人の具体的な名前を列挙することに重きが置かれ、「辺塞詩」というジャンル

1) 袁行霈『中国文学史（第三版）』第二卷、高等教育出版社、2014、P94

2) 袁行霈『中国文学史（第三版）』第二卷、高等教育出版社、2014、P211

3) 徐嘉瑞『中古文学概論』上海亜東図書館、1925、P173

について明確な定義はしていない。この時期、徐嘉瑞以外にも、胡雲翼⁴⁾・賀昌群⁵⁾・劉經庵⁶⁾らも「辺塞詩」という名称を用いてそれぞれ論述を進めている。例えば、賀昌群「論唐代的辺塞詩」では、辺塞詩をさらに初唐・盛唐・中唐・晩唐に分けて論述し、さらに唐代辺塞詩の数を統計している。

20世紀の50年代以後、辺塞詩研究に新たな動向が現れた。胡大浚は「七十年邊塞詩研究綜述」⁷⁾のなかで、この時期の辺塞詩研究について概略、以下のように述べている。—この時期（解放から文革まで）ではマルクス主義文芸理論で辺塞詩が研究されたことと、また、国際情勢（中ソ対立や東西冷戦）や、戦争に備える中国国内の状況などから、反戦的な詩が盲目的に批判され、中国古代文學の実際の状況には眼が向けられていなかった。—つまり、この時期の辺塞詩研究の成果は多くなく、さらに政治の影響を受けて、研究の質は高くなかったのである。

1984年に開かれた中國唐代文學學會第二回大會で、辺塞詩について始めて広範かつ集中的に議論された。この大會で、研究者によって、辺塞詩の境界の問題について数多くの議論が行われた。その中で、譚優學は「辺塞詩総論」⁸⁾のなかで、「いわゆる辺塞詩は、まず唐代、とりわけ盛唐期の作品を指す。それは時代の制限がある。私たちが文學研究で用いる辺塞詩とは、地域について言うと、主に、万里の長城一帯および河西隴右の辺塞の地を指す。作者について言うと、自分自身、辺塞生活をしたことがある必要がある。辺塞詩人の作品について言うと、辺塞詩がその詩人の作品の重要な位置を占めている必要がある。」と述べている。これは、「辺塞詩」の時代を唐代に限定しており、さらに狭義的な定義だといえる。

このような、狭義の意味での「辺塞詩」の定義に対して、さらに広義の意味での「辺塞詩」を考える見方もある。この考え方は、辺塞詩は唐代に出現したのではなく、先秦まで遡り、清代まで作られた、とするものである。例えば、黄剛は「清代邊塞詩繁榮初探」⁹⁾において、「辺塞詩の発展の歴史から見ると、辺塞の詩歌は先秦期に萌芽してから、両漢（前漢・後漢）の時代にその原型がうまれ、魏晉南北朝期にほぼ完成した。この長く、緩慢な形成の過程を経て、この基礎のもと、唐代に辺塞詩はついに最高潮を迎えた。……清代に、辺塞詩創作の社会的條件は、その内部條件と相互に結合することによって、……ついに、躍動感があって壮大な詩歌群の再び隆盛する局面を迎えたのである。」と述べている。狭義の「辺塞詩」は、唐代、とくに盛唐に限定するのに対して、広義のそれは、先秦期に生まれ、清代まで命脈を保ったものになる。

それ以外に、狭義の辺塞詩が、中國の西北地域に限定されるのに対し、広義のそれについて

4) 胡雲翼著『新著中国文学史』北新書局、1937

5) 賀昌群著『賀昌群文集』第三卷、商務印書館、2003

6) 劉經庵編著「中國純文學史綱」、上海書店、1991

7) 胡大浚、馬蘭州「七十年邊塞詩研究綜述」『中国文学研究』2000年（03）、P88-92

8) 譚優學「辺塞詩総論」西北師範学院中文系・西北師範学院学报編輯部[編]『唐代辺塞詩研究論文選粹』、甘肅教育出版社、1989

9) 黄剛「清代邊塞詩繁榮初探」学術研究、1996（06）、P77-81

は、専門家は、「辺塞」は、中国の東西南北四方の辺塞の地を含むべきだと考える。例えば、閻福玲「邊塞詩及其特質新論」¹⁰⁾は、まず「辺塞詩」の時代問題について、上掲の黄剛論文と同じ見解を提出し、さらに、「辺塞詩」の舞臺となる地域について、「辺塞詩」の「辺」は、万里の長城のラインに沿って、西北に延伸し、安西四鎮に至る、東北から西北までの辺疆地域を含むだけでなく、ほかの辺疆地域を含むべきだ。従って、東西南北四方の辺塞を題材とする詩はみな辺塞詩と見なすことができる。……時代の問題も、私たちは辺塞詩は唐代に限定することはできないと考える。実際に、國家があれば、辺疆の地を防衛する必要が生まれるのであり、こういった行為を描く辺塞詩が生まれるのであろう。歴史上の王朝にはすべて、それぞれ、辺塞での創作活動があったのであろう。」と述べている。

それ以外に、辺塞詩の定義について、辺塞詩と辺境の防衛・戦闘とのかかわりをめぐって、さらに議論がある。一部の研究者は、辺塞詩のなかには必ず辺境防衛・戦闘といった要素を含んでいなければならないと考える。他の研究者は、直接的でも間接的でも、辺境防衛・戦闘と関連があれば、それでよいと考える。たとえ辺境防衛・戦闘を直接的に描写しなくとも、辺塞の風土や風俗を描きさえすれば、それは辺塞詩と見なすことができる。

「辺塞詩」ということばは、中国文学史上、確乎としたジャンルを形成しているが、具体的な境界線の引き方については諸説紛々としていて、実は明確ではないのである。

二

第二節では、そもそも「辺塞」ということばはどのように生まれ、どのように使われ、どのような意味を持つのか——という問題について論じる。

『漢語大詞典』（2001年第二版）の釈義によれば、先秦期にすでに「辺」と「塞」の二字にそれぞれ「辺境」の意味があったことがわかる。

句踐用帥二三之老，親委重罪，頓頽於邊。（『國語』「吳語」¹¹⁾）

其（引用者注、秦國）在趙者剌然有芥而據松柏之塞，負西海而固常山，是地遍天下也。（『荀子・疆國』¹²⁾）

以上は「辺」字と「塞」字それぞれの用例であり、「辺塞」という熟語は、『史記』の用例が最も古い。

10) 閻福玲「邊塞詩及其特質新論」河北師範大学学报（哲学社会科学版）、1999（01）、P101-1

11) 徐元浩撰『國語集解』王樹民、沈長雲点校、中華書局、2002

12) [清]王先謙著『荀子集解』、中華書局、1988

專邊塞之思慮，暴散中野無以報，乃敢惟他議以幹用事者……（『史記』卷六十「三王世家」¹³⁾）

この用例は、霍去病の上書文のなかに見られることに注目しなければならない。霍去病は、前漢の武帝のとき、嫫姚校尉、驃騎將軍に任命され、匈奴を討伐して大功をたてた人物である。従って、この「辺塞」とは、匈奴との戦闘の前線基地を指している。

『史記』のあと、正史において「辺塞」ということばは多く出現するようになる。

漢書 ¹⁴⁾	卷一上高帝紀第一上	興關中卒乘邊塞。關中大饑，米斛萬錢，人相食。令民就食蜀、漢。
	卷七昭帝紀第七	以邊塞闊遠，取天水、隴西、張掖郡各二縣置金城郡。
	卷八宣帝紀第八	匈奴單于稱臣，遣弟殺蠡王入侍。以邊塞亡寇，減戍卒什二。
	卷二十八下地理志第八下	習俗頗殊，地廣民稀，水草宜畜牧，故涼州之畜為天下饒。保邊塞，二千石治之，鹹以兵馬為務；酒禮之會，上下通焉。
	卷五十四李廣蘇建傳第二十四	陵敗處去塞百餘裏，邊塞以聞。上欲陵死戰，召陵母及婦，使相者視之，無死喪色。
	卷七十四魏相丙吉傳第四十四	此馭吏邊郡人，習知邊塞發奔命警備事，嘗出，適見驛騎持赤白囊，邊郡發奔命書馳來至。馭吏因隨驛騎至公車刺取，知虜入雲中、代郡，遽歸府見吉白狀，因曰：“恐虜所入邊郡，二千石長吏有老病不任兵馬者，宜可豫視。”
	卷九十四下匈奴傳第六十四下	臣聞北邊塞至遼東，外有陰山，東西千餘裏，草木茂盛，多禽獸，本冒頓單于依阻其中，治作弓矢，來出為寇，是其苑囿也。
後漢書 ¹⁵⁾	卷二十 銑期王霸祭遵列傳第十	乃因閑說光武曰：“河北之地，界接邊塞，人習兵戰，號為精勇。今更始失政，大統危殆，海內無所歸往。明公據河山之固，擁精銳之眾，以順萬人思漢之心，則天下誰敢不從？”
	卷二十六 伏侯宋蔡馮趙牟韋列傳第十六	漁陽以東，本備邊塞，地接外虜，貢稅微薄。安平之時，尚資內郡，況今荒耗，豈足先圖？
	卷四十五 袁張韓周列傳第三十五	和帝即位，竇太后臨朝，後兄車騎將軍憲北擊匈奴，安與太尉宋由、司空任隗及九卿詣朝堂上書諫，以為匈奴不犯邊塞，而無故勞師遠涉，損費國用，徼功萬裏，非社稷之計。
	卷四十八 楊李翟應霍爰徐列傳第三十八	烏桓兵寡，而與鮮卑世為仇敵，若烏桓被發，則鮮卑必襲其家。烏桓聞之，當複棄軍還救。非唯無益於實，乃更沮三軍之情。鄒靖居近邊塞，究其態詐。若令靖募鮮卑輕騎五千，必有破敵之效。
	卷八十六 南蠻西南夷列傳第七十六※	賢栗惶恐，謂其耆老曰：“我曹入邊塞，自古有之，今攻鹿芴，輒被天誅，中國其有聖帝乎？天祐助之，何其明也！”
	卷八十七 西羌傳第七十七	元帝時，彊姐等七種羌寇隴西……自彊姐羌降之後數十年，四夷賓服，邊塞無事。

13) [西漢] 司馬遷撰『史記』、中華書局編集部点校、中華書局、1982

14) [東漢] 班固撰、[唐] 顏師古注『漢書』、中華書局編集部点校、中華書局、1962

15) [南朝宋] 范曄撰、[唐] 李賢注『後漢書』、中華書局編集部点校、中華書局、1965

三国志 ¹⁶⁾	魏書二十四韓崔高孫王傳第二十四	文帝踐阼，拜尚書，出為幽州刺史。北中郎將吳質統河北軍事，涿郡太守王雄謂林別駕曰：“吳中郎將，上所親重，國之貴臣也。仗節統事，州郡莫不奉箋致敬，而崔使君初不與相聞。若以邊塞不脩斬卿，使君寧能護卿邪？”
	魏書二十六滿田牽郭傳第二十六	文帝初，北狄強盛，侵擾邊塞，乃使豫持節護烏丸校尉，牽招、解俊並護鮮卑。
晉書 ¹⁷⁾	卷五十六列傳第二十六	故匈奴求守邊塞，而侯應陳其不可，單于屈膝未央，望之議以不臣。是以有道之君牧夷狄也，惟以待之有備，禦之有常，雖稽顙執贄，而邊城不弛固守；為寇賊強暴，而兵甲不加遠征，期令境內獲安，疆場不侵而已。
	卷六十列傳第三十	拜駙馬都尉，出為西域戊己校尉長史。太子僕同郡張勃特表，以靖才藝絕人，宜在臺閣，不宜遠出邊塞。
	卷一百二十九載記第二十九	史臣曰：蒙遜出自夷貊，擅雄邊塞。屬呂光之悖德，深懷仇粥之冤；推段業以濟時，假以陳、吳之事。
宋書 ¹⁸⁾	卷七十七列傳第三十七柳元景顏師伯沈慶之	上嘉其功，詔曰：“虜驅率犬羊，規暴邊塞，輔國將軍、青冀二州刺史師伯宣略命師，合變應機，濟戎奮怒，一月四捷，支軍異部，驍勇齊效，頻梟名王，大殲群醜。朕用嘉歎，良深於懷。可遣使慰勞，並符輔國府詳考功最，以時言上。”
	卷九十四列傳第五十四恩幸	詔旨”虜犯邊塞，水陸遼遠，孤城危棘，複不可置”。
魏書 ¹⁹⁾	卷一百三列傳第九十一蠕蠕匈奴宇文莫槐徒何段就六眷高車	延興五年，予成求婚婚娉，有司以予成數犯邊塞，請絕其使，發兵討之。
北史 ²⁰⁾	卷五十四列傳第四十二	羨以虜屢犯邊塞，自庫推成東拒於海。
	卷七十一列傳第五十九	自是突屢寇邊塞，胡賊劉六兒複擁眾劫掠郡境，子崇表請兵鎮遏。帝複大怒，令子崇行長城。子崇行百餘裏，四面路絕，不得進而歸。
	卷九十八列傳第八十六	延興五年，予成求婚婚娉，有司以予成數犯邊塞，請絕其使，發兵討之。帝曰：“蠕蠕譬若禽獸，貪而亡義，朕要當以信誠待物，不可抑絕也。予成知悔前非，遣使請和，求結姻援，安可孤其款意？”自此東魏邊塞無事，至於武定末，使貢相尋。
	卷九十九列傳第八十七	論曰：四夷之為中國患也，久矣，北狄尤甚焉。種落實繁，迭雄邊塞，年代遐邇，非一時也。

以上の一覧表からわかるように、『史記』以外の、唐以前の史書のなかで「辺塞」の語は全部で二十五例見られる。『後漢書』卷八十六「南蠻西南夷列傳」の「辺塞」を除くと、『漢書』から『北史』に見られる「辺塞」が指す地域は、中国の北方の異民族と境界を接する一帯、あるいは、北方の異民族との戦争の前線を指している。

ここで指摘しなければならないのは、上で述べた「北方」が客観的あるいは地理的な北方地

16) [晋] 陳寿撰、[南朝宋] 裴松之注『三国志』、中華書局編集部点校、中華書局、1982

17) [唐] 房玄齡等撰『晋書』、中華書局編集部点校、中華書局、1974

18) [南朝梁] 沈約撰『宋書』、中華書局編集部点校、中華書局、1974

19) [北魏] 魏収撰『魏書』、中華書局編集部点校、中華書局、1974

20) [唐] 李延寿撰『北史』、中華書局編集部点校、中華書局、1974

域を指すだけでなく、主観的あるいは相対的な「北方」をも含んでいるということである。『宋書』卷九十四「恩悻傳」で引用される宋孝武帝の詔書に「虜犯邊塞，水陸遼遠，孤城危棘，複不可置」と「辺塞」の語がみられるが、これは劉宋が、北魏と境界を接する地帯を指している。

以上は、正史中の「辺塞」であるが、詩歌で「辺塞」の語が現れるのは、いつの時代のどの詩人の作品であるのか。逯欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』を検索しても「辺塞」の用例は見つからない。管見のかぎりでは、初唐の駱賓王の詩に見られるのが最も古い。これは、上掲の正史よりもきわめて遅いと言える。駱賓王「詠懷古意 上裴侍郎」²¹⁾は全二十八句からなる五言古詩で、以下に第十七句以下を掲げる。

一得視邊塞，萬里何苦辛。劍匣胡霜影，弓開漢月輪。金刀動秋色，鐵騎想風塵。為國堅誠款，捐軀忘賤貧。勅功思比憲，決略暗欺陳。若不犯霜雪，虛擲玉京春。

龍朔三年（663）、吐蕃は吐谷渾を滅ぼし、その後さらに于闐・疏勒を陥れ、天山北側の西突厥と連携を取って、咸亨元年（670）には龜茲を占領する。これで安西四鎮のうち三つが陥落したことになり、この報を聞いた駱賓王は、吏部侍郎裴行儉に上書して自ら従軍を願い出た。「詠懷古意 上裴侍郎」はこのときの詩であり、これらの一連の史実と、駱賓王詩の措辞から考えて、この詩「辺塞」は明らかに中国西北の地域——具体的には河西隴右から安西四鎮の一带まで——を指すことがわかる。

さらにこの初唐の時期、陳子昂の「度峽口山、贈喬補闕知之、王二無競」²²⁾詩にも、「信關胡馬沖，亦距漢邊塞」と「辺塞」の語が見られる。この詩は、垂拱二年（686）に、東突厥が入寇した時、陳子昂は喬知之に従って北征し、張掖（現在の甘肅省）へと至った。この詩は、峽口山を通り過ぎた時の作である。駱賓王にせよ、陳子昂にせよ、唐・高宗の時代、実際に吐蕃や東突厥との戦闘に従事して辺境の地に至った時に詩を作り、その詩のなかに「辺塞」という語が用いられている。

以上のことからわかるように、史書を撰述した史臣にせよ、詩人にせよ、それぞれの個別的な事情はあるにせよ、「辺塞」の語を用いる場合、ほとんどの場合、中国北方の、異民族支配地域との境界を指している。では、こういった北方の異民族との戦争・戦闘や、その地の風物を描写する詩歌は、いつ詩歌の題材・ジャンルとして独立したのであろうか？

21) [唐] 駱賓王撰、[清] 陳熙晉注『駱賓王集』、王群粟点校、浙江古籍出版社、2015、P159-163；楊柳、駱祥發『駱賓王評傳』、北京出版社、1987

22) [唐] 陳子昂『陳子昂集』、徐鵬点校、上海古籍出版社、2013、P23-24

三

中国文学の歴史を総覧すると、戦争や従軍体験を描写する詩歌で、最も早いものは先秦期に遡ることができる。ただし、『詩経』のなかには戦争に関する詩歌が多いわけではない。『詩経』のなかのこれらの詩は二つの種類に分けることができる。一つは、戦争の場面を描写し、統治者を賛美・賞賛するものである。例えば「小雅」の「六月」がそれにあたる。もう一つは、故郷の家族が出征した兵士を思ったり、出征した兵士が故郷の家族を思ったりするものである。例えば、「豳風」の「東山」がそれにあたる。後者の種類には、長期間の戦争への不平不満や厭戦の感情が描写され、後世の戦争に関する詩歌、あるいは「辺塞詩」によく見られる要素がすでに現れていることが確認できる。また、『詩経』の戦争・従軍を描いた詩には、風景や風物を描写することによって詩の作者および詩中の主人公の感情を表現することがある、しかし、それは後世の詩歌に比べれば非常に単純であり、情と景が融合した詩歌のレベルに達しているとは言えない。

前漢・後漢期においても、現存する作品群のなかで戦争や従軍を描いたものは多くはない。比較的整ったかたちで戦争の光景や従軍の体験を表現した「戦城南」「十五従軍征」²³⁾、辺境の風光を詠う「武溪深」²⁴⁾、辺境の生活を描いた「古胡無人行」²⁵⁾、朝廷の対外防衛政策を賞賛する「上之回」²⁶⁾ などがあり、さらに、北方の異民族に関連する歌謡「匈奴歌」²⁷⁾ などがある。

これらは主に「樂府（詩）」と呼ばれるジャンルに属する詩歌であるが、漢代には樂府詩の題（樂府題）に「従軍行」を持つ詩歌が出現する。郭茂倩『樂府詩集』²⁸⁾ 卷三十二「相和歌辭」七「平調曲」三では、魏の王粲「従軍行五首」を掲載されるが、その解題に言う。

『古今樂録』曰、「従軍行」、王僧虔云、荀勗所載左延年「苦哉」一篇、今不傳。『樂府解題』曰、「従軍行」、皆軍旅辛苦之辭。『廣題』曰、「左延年辭云、「苦哉邊地人、一歳三従軍。三子到燉煌、二子詣隴西。五子遠鬪去、五婦皆懷身。」陳伏知道又有「従軍五更轉」。

[陳] 釋智匠『古今樂録』では、[西晋] 荀勗の樂録（正式な書名は不詳）に、[魏] 左延年に「苦哉」一篇が著録されるものの、釋智匠の時代には失伝していたと、記される（「樂曲の演奏方法や歌唱方法が失伝していた」という意味であろうか）。『樂府廣題』（撰者不詳）には、左延

23) 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』、中華書局、1988、P157 : P335

24) 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』、中華書局、1988、P163

25) 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』、中華書局、1988、P290

26) 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』、中華書局、1988、P156

27) 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』、中華書局、1988、P124

28) 郭茂倩編『樂府詩集』、中華書局、1979

年の歌詞がすべて記録されている。王粲にせよ左延年にせよ曹魏の人である。王粲の「從軍行五首」は、『文選』卷二十七「軍戎」に収められることから、戦争を詠った詩として極めて著名であり、その内容は、「曹操に従って四方に行軍したことを述べるものであり、從軍の地域は、西方異民族（獯虜・羌夷）の平定を含みつつ（其一）、重點は、魏の最たる敵である呉の經略に置かれている（其二・其三・其四）。其五は、從軍を總括しつつ、最後に凱旋の有様を述べて、作の五首を締め括る」²⁹⁾。

つまり、魏の征服戦争を述べるものであり、地域も中国全土の四方を網羅する。その一方、左延年の歌詞には「燉煌」「隴西」という中国西北の地名が見られる。「從軍行」は、王粲・左延年より前の、古辞は現存しないが、のちにこの樂府題を用いた擬古樂府詩が大量に作られ、戦争・從軍を描く詩、あるいは「邊塞詩」の系譜のなかで重要な位置を占めるようになった。

四

南北朝時期に至ると、さまざまな文學創作に対する評論批評の範囲は大いに拡大した。そのなかで、劉宋・齊・梁の三代にわたって活躍した江淹（445-505）は、「雜體詩三十首」を作った。現在、『文選』³⁰⁾ 卷三十一「雜擬」下に見ることができる。これは、古詩や前漢の李陵から南朝宋の湯惠休に至るまでの詩を江淹一人の手で模擬した三十首の連作で、『文選』に収められた詩のほぼすべての時代を掩うもので、冒頭に置かれた「序」では、當時の文學評論についての、江淹自身の見解が述べられる。

この序文において、江淹は當時の「貴遠賤近（遠いものを貴び身近なものを重んじる）」、「重耳輕目（自分の目で確かめるより評判を大事にする）」という風潮に不満を示し、異なる風格を持つ、様々な作品に対して、全てを肯定する非常に寛容な態度を示している。森博行「江淹「雜體詩」三十首について」³¹⁾ は、「江淹の「雜體詩」三十首は、本歌とできる限り似せることによって、二語で表わされた個々のサブタイトルと共に、前代の詩人の詩的本質を敘述しようと意図されたものであり、且つ三十首全體として文學史を構成しようと意図されたものである。そして、それはおおむね「文學史家」としての彼の見識を示すものである」と指摘する。つまり、江淹の持つ文學批評は、歴史的変遷を射程に入れた極めてマクロなものであることがわかる。江淹の時代にはすでに比較的完全な文學批評の體系が確立されていたことが確認され、かつまた江淹自身も、通時的な觀點から極めて広大な構想を持った文學批評家であったと推測される。

では、具體的に「雜體詩三十首」の作品を見てみよう。「雜體詩三十首」の中で、從軍、戦争に関わる作品は三首あり、それは、「李都尉（陵）從軍」、「王侍中（粲）懷德」と「鮑參軍（照）

29) 松原朗「邊塞詩の出現 - 梁陳における邊塞樂府を中心に -」『中国詩文論叢』第24集、2005

30) [南朝梁] 蕭統編、[唐] 李善等注『六臣注文選』、中華書局、2012

31) 森博行「江淹「雜體詩」三十首について」『中国文学報』27、1977（04）、P 1-35

戎行」である。

「李都尉（陵）從軍」は「雜體詩三十首」の第二首である。『文選六臣注』の劉良は「これは「攜手上河梁」を擬する」と述べる。劉良の指摘に従って、以下、李陵「與蘇武（攜手上河梁）」（『文選』卷二十九「雜詩」上）とその江淹の摸擬作を対照させてみよう。

江淹「雜體詩・李都尉從軍」

樽酒送征人，踟躕在親宴。
日暮浮雲滋，握手淚如霰。
悠悠清川水，嘉魴得所薦。
而我在萬裏，結發不相見。
袖中有短書，願寄雙飛燕。

李陵「與蘇武」

攜手上河梁，遊子暮何之。
徘徊蹊路側，悵悵不能辭。
行人難久留，各言長相思。
安知非日月，弦望自有時。
努力崇明德，皓首以為期。

上記の両詩を比較すると、江淹の摸擬作は、李陵の詩の持つ、素樸で古風な風格をそのまま引き継ぎ、表現技法としては、「踟躕在親宴」や「徘徊蹊路側」など、一人稱の視點を用いて人の動作や心理を描寫し、内容的には、親友と別れるのが忍びない感情を表現し、李陵の詩との一致を見せる。

江淹の摸擬作には「從軍」という二字がある。しかし、李陵本人の経歴は從軍と深い関係があるものの、李陵の原詩の方には「從軍」の要素は確認できない。それと同じく、江淹の摸擬作は、第一句「樽酒送征人」以外、兵士が出兩詩とも離別詩と言うべき作品である。

第七首「王侍中懷德」は、建安七子の一人、王粲（177-217）の詩を摸擬する作品である。『文選六臣注』の張銑は「これは武帝の恩徳に感激する」と注している。一方、清の呉淇は『六朝選詩定論』³³卷十七で「此雲擬仲宣〈公宴詩〉，原詩‘昊天降豐澤’云云，乃紀時以興起，此詩采〈七哀詩〉語，用自述為起……」と指摘する。

では、江淹は王粲のどの詩を摸擬したのだろうか。実際に、王粲の詩諸作と、江淹の摸擬作を比較対照してみると、江淹は確かに王粲「七哀詩」（『文選』卷二三「哀傷」）を意識しているが、さらに王粲の「從軍詩」の風景描寫の手法を踏襲していることが指摘できる。

江淹「王侍中懷德」の主な内容は、王粲「七哀詩」と同じく、戦災が続く長安から離れ、荊州の劉表を頼り、ついには曹操に身を寄せた王粲自身の経歴を叙述するものである。

また、両詩の構造から見ると、「王侍中懷德」末尾が曹操の功徳を称賛し、曹操に感謝の意を示す部分が「從軍詩」の最後の部分と似ている。王粲「七哀詩」は、後漢末の戦乱によって引き起こされた惨状を描寫することで名高い傑作である。また、王粲の「從軍詩」は、『文選』では詩題を「從軍詩」に作るが、宋・郭茂倩『樂府詩集』卷三十二「相和歌辞」七「平調曲」三では「從軍行」となっており、現存する樂府詩「從軍行」の最も古い歌辞となっている。王粲より後の時代に作られる「從軍行」は、『樂府解題』に「皆軍旅苦辛之辞」と指摘されるよう

に、多くが従軍の苦しみを詠う楽府詩であるが、王粲の作品はそうではなく、曹操の功德を称賛することに重点が置かれている。

江淹「雜體詩三十首」第二十九首「鮑參軍戎行」は、劉宋の鮑照の詩を模擬したものである。呉淇『六朝選詩定論』³²⁾ 卷十七「評論」は、江淹の「鮑參軍戎行」について、「全篇處與明遠詩相合」と、全篇、鮑照（明遠）の詩と対照できることを言うが、鮑照のどのような詩を模擬したものであるのか、明らかではない。もちろん、詩題に「戎行」とあるので鮑照の従軍を詠った詩を模擬したもので、このジャンルについては鮑照に「代出自薊北門行」（『文選』 卷二十八「樂府」下では「代」字なし）などの楽府詩がのこされている。

鮑照は、梁の鍾嶸『詩品』³³⁾ に「中品」として評価される詩人で、同書の鮑照を評した文に「貴尚巧似、不避危仄（景物の描写が真に迫ることを追求し、敢えてかどが立った、難解な表現を用いた）」とあるが、従軍を詠った詩が鮑照の代表作であると言及はない。しかし、同書の「序」には「鮑照戎邊」と記されており、辺境を戍守することを詠った詩こそ鮑の代表的な作品との認識が示されている。江淹の「雜體詩」に「戎行」の語があるのも、南朝の文学評論における鮑照詩の評価に基づくものであることは疑いを容れない。

梁代に成立した『文選』には卷二十七に「軍戎」の部立てがあり、そこに王粲の「従軍行五首」を収める。これら一連の事実から、南朝の梁の時代には、「軍戎」「戎行」「戎邊」を詠う詩は、確固として独立した一つのジャンルとして認識されていたことがわかる。

本節（四）の最後で確認すべきは、南北朝の詩歌に「邊塞」の語を用いた作品がないこと、また、詩歌創作のレベルだけでなく、文学評論においても、例えば、鮑照の、従軍を詠った詩、辺境を戍守することを詠った詩を、「戎行」「戎邊」の詩と称するものの、「邊塞」の詩とは称していないことである。前節（二）では、『漢書』から『北史』に至る史書には「邊塞」の語が多数見られ、しかも、「邊塞」が指す地域は、多くの場合、中国の北方の異民族と境界を接する一帯、あるいは、北方の異民族との戦争の前線を指していることを指摘した。しかし、南北朝の詩歌創作および文学評論のレベルでは「邊塞」の語は出現していない。

五

南北朝の分裂時代、そして隋を経て成立した唐朝の時代になると、のちに「邊塞詩」と称される詩歌が大量に作られた。

唐の時代には、詩人の貫籍、官位・職位や、或るテーマや時代に基づいて編集された唐詩選集が出現した。これを『唐人選唐詩』と呼び、古くは明の汲古閣刊『唐人選唐詩八種』などが

32) [清] 呉淇撰、汪俊、黃敬徳『六朝選詩定論』、廣陵書社、2009

33) [南朝梁] 鍾嶸撰、周振甫訳注『詩品訳注』、中華書局、1998

あり、近年では、傅璇琮〔編撰〕『唐人選唐詩新編』³⁴⁾が出版されている。『唐人選唐詩新編』には、『翰林學士集』（許敬宗〔等撰〕）、『珠英集』（崔融〔編〕）、『丹陽集』（殷璠〔編〕）、『河嶽英靈集』（殷璠〔編〕）、『國秀集』（芮挺章〔編〕）、『篋中集』（元結〔編〕）、『玉臺後集』（李康成〔編〕）、『御覽詩』（令狐楚〔編〕）、『中興間氣集』（高仲武〔編〕）、『極玄集』（姚合〔編〕）、『又玄集』（韋莊〔編〕）、『才調集』（韋穀〔編〕）、『搜玉小集』（佚名〔編〕）の十三種が収められる。

このうち『搜玉小集』は編者が不明であるため、『唐人選唐詩新編』では最後に置かれるが、同書の『搜玉小集』「前記」は、「開元年間の後期から天宝年間の初期」³⁵⁾に成立したと推測している。つまり、芮挺章〔編〕『國秀集』とほぼ同時代であり、殷璠〔編〕『河嶽英靈集』よりは前の時代に位置づけられる。『搜玉小集』の内容について、「前言」には以下のようにある。

此書所收為初唐至開元前期詩人，排列次序似先為應制詩，次為邊塞歌行、古詩，又次為閨情懷人之什，又次為歲時應景，又次為行旅述懷，但具體排列上都頗為混雜，看不出編選意圖和選詩標準，……

実際に『搜玉小集』を繙いてみると、崔融「西征軍行遇風」、崔湜「塞垣行」「大漠行」、劉希夷「將軍行」、賀朝「從軍行」、屈同「燕歌行」、鄭愔「塞外」、楊炯「紫驢」、徐彥伯「胡無人行」、盧照鄰「王昭君」、東方虬「王昭君」、郭元振「王昭君」、駱賓王「晚度天山有懷京邑」、徐彥伯「送公主和戎」などが、傅璇琮〔編撰〕『唐人選唐詩新編』の「前記」がいうところの「邊塞歌行、古詩」に相当し、のちに「辺塞詩」と呼ばれるジャンルに属すると判断できる。つまり、『搜玉小集』では、「辺塞詩」としてのジャンル意識がはっきりと形成されていたことが看取できるのである。

しかしながら、『搜玉小集』では書中に、部立て—分類項目—の名称は明記されていない。つまり、崔融「西征軍行遇風」から徐彥伯「送公主和戎」までの詩を、ほかの「応制詩」や「閨怨詩」などとは分けて配列しているものの、これらを何と言うジャンルに属するのか、については言及していないのである。

『搜玉小集』には、駱賓王の辺塞での作品（「晚度天山有懷京邑」）が収録されている。初唐の駱賓王は、陳子昂とともに、最も早い時期に自分の詩作のなかで「辺塞」の語を用いた詩人である。その一方で、『搜玉小集』には「辺塞」という部立ては無いので、唐玄宗の開元・天宝年間に「辺塞詩」というジャンルを表す名称がすでに出現していたかどうかは不明である。

詩歌総集・選集で、「辺塞」という部立てが始めて出現するのは、管見のかぎりでは、北宋の『文苑英華』³⁶⁾である。『文苑英華』は、太宗の勅命をうけて李昉らが編集した詩文の総集で雍熙

34) 傅璇琮編撰、『唐人選唐詩新編』、陝西人民教育出版社、1996

35) 笈文生〔執筆〕、平凡社『世界大百科事典第二版』「文苑英華」

36) [宋] 李昉等撰『文苑英華』、中華書局、1995

四年（987）に成立した。『文苑英華』は「梁の昭明太子編『文選』三十巻の後を継ぐものとして、ほぼ同じ体例のもと」³⁷⁾に編集されており、『文選』と同じく部立てを立てて詩文を収録している。巻二九九「詩」一四九「軍旅」一は、「講閲」（三首）、「征伐」（十九首）、「邊塞」（五十四首）、巻三〇〇「詩」一五〇「軍旅」二「邊將」（六十四首）という構成を取っている。

「軍旅」の下位分類に、「講閲」「征伐」「邊塞」「邊將」の四分類があるが、これらの収録された詩を分析してみると、ほぼすべての詩が、のちに「辺塞詩」と呼ばれるジャンルに属することが確認できる。つまり、この四分類の区別は必ずしも明確でないのである。例えば、「征伐」には、盛唐・高適の「送兵還作」³⁸⁾が収録される。「邊將」には、南朝梁・呉均「邊城將」四首³⁹⁾が収録される。

高適の作も呉均の作もともに、①中国北方あるいは西北の邊塞の風光、②詩人あるいは詩の主人公の従軍体験、③匈奴との戦闘が繰り広げられた漢代への仮託、④忠君報国、など、辺塞詩によく見られる要素を備えており、どちらも、いわゆる「辺塞詩」と見なすことができ、両詩の間に大きな内容的相違はない。もちろん、呉均の作は詩題が「邊城將」であり、だからこそ『文苑英華』では「邊將」に収録されているのであろうが、「邊將」を描いた詩が「邊塞」にも収録されているので、『文苑英華』の分類方法も、『搜玉小集』とおなじく、はっきりとした方針があるようには見えないのである。

ただし、「講閲」「征伐」「邊塞」「邊將」の四分類には、一つははっきりとした事実が確認できる。それは、「講閲」では南朝梁の沈約、北朝周の庾信の作、「征伐」では庾信の作、「邊將」では南朝梁の呉均の作を、唐人の作とともに収めるのに対し、「邊塞」では、収録される五十四首すべてが唐人の作であり、南北朝の詩は収めない。この事実と、詩歌においては初唐の駱賓王・陳子昂になって始めて「辺塞」の語を用いられることとあわせて考えると、「辺塞詩」というジャンルは、唐代に入り「辺塞」という名称を伴って、比較的明確に意識されるようになっていたと考えられる。

37) 平凡社『世界大百科事典第二版』「文苑英華」（笈文生〔執筆〕）。

38) 『全唐詩』巻二一二では詩題を「薊中作」に作る。

39) 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』、中華書局、1988、P1738

